

■自己弁護についての訓練(3/3)

自己本位の態度は人を柔弱にし、ささいなことにも傷つけられやすい、全く欲張りな人間にしてしまう。自己憐憫は人を哀れな人間にしてしまい、善のために大胆に戦わなければならないようなときにも、ただ悲哀に打ち沈ませるばかりである。自己重視は、他人に感動を与えることのできない人間をつくり出す。そういう人は、他人からは「あの人は困った人間だ」と思われていても、自分では重要人物であるかのように思い込んでいる。うぬぼれる人は、人から軽蔑されるようになる。他人の成功を見て苦々しく思う人は、それに目がくらんで、自分の欠点が見えなくなる。他人をうらやんでばかりいると、人にうらやまれるような人物になれない。短気は人を小人物にする。自分を甘やかしていると、人にいやみばかり言う人間になる。自分の思うままに振舞っていると、ついには怠惰になる。自己弁護は、その人のよい意味での自尊心を破壊し、ますますその人を小人物にする。

私の言う自己弁護についての訓練とはこれである。すなわち、泣くことは人を弱くし、不平は人を臆病にし、他人を非難することは人をわきまえない乳飲み子のようにし、自己憐憫は人を哀れな人間にし、わめきちらすことはその人の未熟さを余すところなくさらけ出すことになるゆえ、これらのことを避けるように訓練を積むことである。

自己弁護についての訓練とは、あらゆる自己本位、自己憐憫、自己重視、自己放任、自己弁護的な態度を打破することである。もしだれかが榮譽を受けるなら、喜ぶべきである（1コリント12:26）。人に無視されても、そんなことは忘れなければならない。与えられた仕事が大きすぎて手に負えないようであるなら、自分でも、また他人の前でもその事実を認め、潔く他の人に譲るべきである。そうすればきっと成長して、その仕事を完成することができるようになる。もしある仕事を、自分よりも他の人のほうが上手にできるなら、快くその人に譲るべきである。意地を張り、怒って歯をむき出しかねないような態度をとってはならない。私たちは野良犬ではなく、キリスト者なのである。

自己弁護についての訓練とは、「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬を

もって互いに人を自分よりまさっていると思う」こと、「思うべき限度を越えて思い上がらないで、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をする」こと、「迫害する者を祝福し……のろってはならない」ことである（ローマ 12:10, 3, 14）。また、「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思う」こと、「すべてのことを、つぶやかず、疑わずに」すること、「非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあって傷のない神の子どもとなる」ことである（ピリピ 2:3, 14, 15）。つまり、自分の義務を全うし、他人に善を行なうことである。

自己弁護をする者は、卑劣な、墮落した、破壊的な人間になってしまう。自己を否定する者は、健全で、有用な、高貴な人間になることができる。私たちは苦難のつぼで鍛えられ、人生の試練で試されて、神の御子に全く服従する者とならなければならない。その御子は、「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、……死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われた」のである（ピリピ 2:7-9）。

十字架を負うことは天国の民であることを示す。反対に、十字架を拒むことは、卑しい自己弁護をすることである。自分をあわれんで甘やかすことは墮落をもたらす。しかし、人間として果たすべきことを御霊の力によって果たすことは、自己弁護をされなかった御子をお喜ばせすることである。

どこへでも

イエスがともにいてくだされば
安らかに行けるでしょう

どこにいても

この世において
イエスは私を導かれます

どこにいても

イエスがいまさなければ
あふれる喜びも消え失せるでしょう

どこにいても

イエスがともにいてくだされば
私には恐れることはありません

どこにいても

イエスがともにいてくだされば
私はひとりではないのです

友が背を向けてしまっても

イエスは私の友です

変わることはありません

イエスの御手が

荒れ果てた道に 私を連れて行っても

イエスがともにいてくだされば

どこでも それは賛美の家です

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第八章「自己弁護についての訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。